

ライプニッツ
と
哲学史研究の哲学
——連続体の数理哲学史へ向けて——

池田 真治
富山大学

哲学史研究の意義について議論する意義

- 昨日の人工知能・ロボットの哲学のシンポジウムでの感想。
 - 深層学習で、システムがなぜそういう結果を出したか、その理由を説明するのは、まだ難しいとのこと。
 - 哲学者がなぜそう考えたのか、その理由の体系的解明を目指す哲学史研究がAIに代替されるのは、まだ当分先っぽい。
- 
- 人間が哲学史研究の意義について議論する意義はまだありそう。

自己紹介

- 哲学専攻。
- 論理学や数学の哲学に関心。
- 博士後期後、フランス留学。哲学史研究の洗礼を受ける。
- 主に、ライプニッツについて、連続体や無限小、モナドの概念をテーマに論文を書く。
- ライプニッツやデカルトの翻訳。
 - 『デカルト 数学・自然学論集』法政大学出版局2018年3月。
 - 『ライプニッツ著作集第2期第3巻』工作舎、2018年6月27日、近刊。
- 詳しくは Researchmapなどwebで。

イントロ

哲学史研究（者）のジレンマ

- 哲学的意義を求めて現在の諸問題との連関へ
- 歴史的意義を求めて過去のコンテクストへ

Q. 「哲学史研究は哲学的かつ歴史的でありえるのか」

植村： **YES!** → 「歴史的・規範的アプローチ」

稲岡：（次回のお楽しみ）

イントロ

- **村上勝三**：現代の哲学を発展の頂点とみなす進歩的哲学史観を批判。ある主題に関する論争を「**理由の系列としての哲学史**」として描くことを提唱。
- 村上は、異なる時代の異なる「**ものの見方**」の発見を通じて、現代を批判的に反省することこそ、哲学史の意義があると見ている。
- 利点：現代哲学の観点からはおよそ関心を向けられないテーマ、たとえば「**神の存在論的証明**」なども、理由の系列の中で有意義に問い直すことができる。

残されている問題

- 哲学史自身に「**収穫逡減の法則**」を適用した場合に関する問題（松田発表との関連）。



- 哲学史は、現代哲学や他の分野に比べ、費やしたエネルギーに見合うだけの成果（哲学的旨味）が得られない（？）



- 若手哲学研究者の哲学史離れ（？）

残されている問題

- 前回シンポジウム



- 少なくとも、哲学史の哲学業界内部における意義については、全体としてある程度の意義を認めることができる、という結論。



- 個別の哲学史研究のケース



- 1st. 「ライプニッツ研究の場合」

ライプニッツ研究の場合

- 池田：**哲学史の哲学業界外部における意義**について、問題提起。
- 多様な分野で活躍したライプニッツは、哲学業界外部からも関心を向けられる場合が多々あり、他分野が要求する研究基準にもある程度応えなければならない。



- 近年のライプニッツ研究における**歴史学のアプローチ**の浸透。
- 私がテーマとしている「**連続体の迷宮**」。
- 自身が専門としている「**数理哲学史**」のアプローチ。

話の流れ

1. ライプニッツ研究の近年の傾向
2. ライプニッツ研究の方法
3. 私自身のライプニッツ研究
4. 数理哲学史のアプローチ

「ライプニッツ・ルネサンス」

19C半～20C初頭

- ゲルハルト版をはじめとするライプニッツ著作集の刊行。
- 数学の基礎をめぐる論争。
- ラッセル、クーチュラらの「論理主義」的解釈が登場。
- カッシーラーの体系的研究。



- 「ライプニッツ・ルネサンス」

「ライプニッツ・ルネサンス」

- **現象学への影響**（フッサール、マーンケ、ハイデガーなど）
- **数学の哲学への影響**（ヘルマン・ヴァイル、ゲーデルなど）
- **フランス現代思想への影響**（ドゥルーズ、ミシェル・セールなど）
- **1970-80年代の言語分析哲学への影響**（石黒ひで、ベンソン・メイツなど）

ライプニッツの特殊性

- ライプニッツ・ルネサンスに見るように、後世の哲学者への影響や、現代の諸科学への影響という観点から見ると、哲学史研究の中でも、**ライプニッツの場合はかなり特殊**かも。
- しかし、**哲学史における哲学者の意義は、哲学者への影響や、現代科学への影響によって単純に測られるものではない。**
- 過去の哲学者に対する後の時代から見た評価は、**アナクロニズムに陥る危険**。ライプニッツ・ルネサンスが落ち着いた今、哲学史におけるライプニッツの意義とは何か、冷静に見つめる必要。

ここ50年における歴史的研究の革新

- 現代では、ライプニッツの思想の発展を描く、**歴史重視の研究スタイル**が主流という印象。
- ガーバーやフィッシュンらは「最終的な体系」がライプニッツにあったことに懐疑的。
 - フィッシュン→ライプニッツの思想はその最後までつねに変容してきたのであり、何かライプニッツに固定的で最終的な体系があると思えるのは幻想。
 - ガーバー→初期や中期にすでに晩年のモナドの考え方があったというような「モナド論的読み方」をするのは無意味。歴史的アプローチを採用し、モナドロジーに至るまでの時系列的な思想の発展を描く。
- アカデミー版の出版や電子化による原典資料の利用可能性により、クロノロジカルな厳密性を重視する歴史学的手法が、ライプニッツ研究にも可能になった結果。

体系的研究の意義

- ライプニッツが試行錯誤のなかで辿り着いた「**もっとも見込みがありそうな体系**」というものを最終的な体系として描き出す試みも、十分意義があると思う。
- その場合、**ライプニッツの観点から**「もっとも見込みがありそうな体系」なのか、**哲学的な観点から**「もっとも見込みがありそうな体系」なのか。
- 前者は歴史学的観点が強くなるだろうし、後者は現代的観点が強くなる。

ラッセルの哲学的アプローチ

- ラッセルのアプローチは、完全に後者。
- 『ライプニッツの哲学の批判的解説』(1900) 第一版への序文



ラッセルは、時代や場所の影響、哲学者の体系の発展、思想の発展の原因といった歴史的側面の探求が、哲学史の主流だと認識。

しかし、歴史的研究では、諸哲学の関係ばかりが問われて、哲学そのものが無視される傾向がある。

過去の哲学者に向かう**純粋な哲学的態度**がありうる。

ラッセルの哲学的アプローチ

- なぜなら、真に傑出した哲学者においては、諸々の見解はその哲学者の体系内において密接に結びついており、それらを学ぶことで重要な哲学的真理を得ることができる。
- 過去の諸哲学はいくつかの大きなタイプに属するので、そのようなある哲学の基礎が何であるかも検討可能。
- その体系の整合性を問うことで、その哲学に対する根本的な反論を問うことができる。

ラッセルの哲学的アプローチ

- そうした哲学的探求にあって、
「哲学者は心理学的に説明されるものではない」
- つまり、「彼・彼女がこの見解に至ったのはいかなる発展のプロセスによってか」という**歴史的問いは**、「この見解が正しいかどうか」という**哲学的問いとは論理的に無関係**。
- 「**歴史的事実ではなく、哲学的真偽が、この探求において第一に注意を要する事柄である**」

ラッセルの哲学的アプローチ

- 哲学的研究としては、ライプニッツがなぜモナドや不可識別者同一の原理、理由律などを考えたのか、に関する哲学的問いが主導しなければならない。
- ラッセルの立場：モナド論は、一連のライプニッツの学説から、いわば理由の連鎖として演繹される。
- ライプニッツの哲学がほとんど彼の論理学から導かれたものである、という論理主義的解釈として知られる。
- ラッセルのアプローチは、その後の英語圏のライプニッツ研究に決定的な影響。

歴史的アプローチ

- ある時点でのライプニッツの考えについて深く研究するほうが、歴史的に厳密であり、考察される範囲や資料の観点からも謙虚で信頼できる、という考え。



- 「**定点観測**」アプローチ
- 欠点：固定された時点に集中することでかえって全体像を見えにくくしたり、現在との連関や哲学的な問題関心から離れることで哲学的洞察や現代的意義を得にくくする。

歴史的アプローチ

- 定点観測することではしか見えてこない新しい発見もあり、歴史的アプローチが、哲学的洞察や現代的意義を得ることを完全に排除することもないはず。
- ただ、歴史的アプローチは、哲学的洞察や現代的意義を本来の目的としない。
- ここで、どうしても哲学的アプローチとのすれ違いが生じる。

ライプニッツ哲学研究の困難

- ライプニッツの業績のうち、哲学はほんの一部。
- ライプニッツには体系的著作がなく（『モナドロジー』など、あっても要約的）、関心も多岐に渡るため、体系的主著があるデカルトやカントなどと比べると、その研究はテキスト・クリティークになりづらい。
- 哲学上の重要な学説の動機が、未編集の断片とか、まったく他の分野における仕事に隠されている可能性。
- もっとも、ライプニッツの万能性は、ライプニッツ研究者の弱みであるとともに強みにもなりうるのであり、多彩な分野との交流やさらなる研究の進展の可能性を開くものでもある。

ライプッツの哲学研究の可能性

- 未だアカデミー版は未完。
- これまでの数学や哲学に関する著作をベースとした研究から、他の分野に関する遺稿や書簡の研究が進展。
- とりわけ、アカデミー版の「自然学的・医学的・技術的著作」の系列の編纂とともに、ライプニッツの生命の哲学に関する研究（ドゥシュノー、ジャスティン・スミスら）が進展中。
- 情報理論的解釈や神経生理学的解釈など、現代科学との関連性を指摘する解釈もある（内井惣七、Norman Sieroka）。

ライプッツの哲学研究の可能性

- アイデアの宝庫と言われるライプニッツの研究には、現在の視点から生じた学際的な傾向や流行と不可分な側面。
- 現代的アプローチの利点：新しい観点から、過去にはない別の枠組みの下で、ライプニッツの言いたいことがより見えてくる。
- 現代的アプローチの欠点：その問題を現代の目から考察することによって、当の哲学者本人がカバーしようとしていた領域の、一部だけを都合良く切り取ってしまう危険性。

ライプッツの哲学研究の可能性

- 近年のライプニッツ研究は、そうしたアナクロニズムの問題を意識してか、神学的意義を強調した伝記や研究書も活発（アントニャザ、町田一など）。
- 歴史学で見られる、テキスト解釈からプラクティスやモノへの関心のシフト（ブレーデキャンプなど）。

ライプッツの哲学研究の可能性

- いずれの方向に向かうのかは、哲学史研究者がもつ自由であり、またジレンマ。
- そこでは、個々人の哲学史研究は、いずれかのアプローチに偏った研究となってしまうかもしれない。二兎を追うよりは、どちらかに徹底した方が生産的、という見方もあるだろう。
- しかし、それだけでは真理は二極化してしまう。
- **池田：（個人/グループ）研究全体として、あるいは業界全体として、バランスをとることが大事。**

ライプニッツ研究の方法

- ライプニッツの哲学は、過去や同時代の哲学者たちとの対決のなかで変化していく一方で、それ特有の一貫性を併せ持つ。
- その哲学を理解するためには、膨大なコンテクストを理解する必要。
- 「アメリカのライプニッツ」と呼ばれたパースの研究にも同様の問題。
- パース研究者ドヴァールによる、哲学者を研究するためのアプローチの分類が参考になるかも。

ライブニッツ研究の方法

- ① 時系列的アプローチ
- ② ベストヒット的アプローチ
- ③ 体系的アプローチ
- +
- ④ ヴィジョン的アプローチ（ベラヴァール）

ライプニッツ研究の方法

- ドヴァールが採用したのは③体系的アプローチ。
- 利点：対象とする哲学者が、学問分類のなかにどのように哲学を位置づけていたかを軸に、哲学的活動の順序づけられた分類を含む学問分類をひとつ選んで、その周囲の研究について議論を積み重ねれば、全体の視野を失わずにかなり詳細な横道にそれることもできる。
- 「最終的な体系」の問題があるとはいえ、多様な分野で活躍したライプニッツにおいても見込みのある方法。

ライプニッツ研究の方法

- 問題点：これらのアプローチは必ずしも排他的ではない。
- どのアプローチが最適かは、扱いたい哲学者や問題に相対的。哲学史研究者のバランス感覚や先見性、柔軟性が問われる。
- しかし、哲学史という学問の性格上、「唯一最善の方法がある」ということもないだろう。同一の哲学者について、異なる視点から多様なアプローチによって照らしていくことも、哲学史の豊かさにつながる。

ライプニッツ研究の方法

- 池田：哲学史が哲学と歴史の双方を志向する以上、両者は本来相補的であるべき。
- ある研究が哲学的意義に偏って、歴史的意義について見誤っている場合、それは歴史的アプローチで修正されるべき。
- 他方で、歴史的意義に偏って、哲学的意義を見失ってしまっている場合、それは哲学的アプローチで補われるべき。



- 複数の規範を対立させずにうまく調和させる、バランス感覚。

私自身のライブニッツ研究

- テーマ：「**連続体の迷宮**」...点は線をいかにして合成しうるか。
- 方法：②ベストヒット的アプローチ。最近では、自身のこれまでの研究を反省し、①時系列的アプローチを踏まえた研究も。
- このテーマをさらに深めるべく、「**数理哲学史**」のアプローチを模索中。

沢口昭聿

- 連続体の問題について、日本で最初の包括的研究を提示したのは、沢口昭聿の『連続体の数理哲学』（1977）
- 沢口：連続体の哲学的な課題の中心は「ゼノンの逆理の論理学的原因探求」。沢口は、当時の論理学や数学を踏まえてこの課題に取り組んだ。
- しかし、連続体の問題に取り組むためには、近年の科学における空間知覚・時間知覚や概念形成に関する経験的探求もまた、参照されねばならない。そのことは、連続体の本性からして明らか。

連続体の迷宮

- 連続体は、一方で数学や物理学などの理論において高度に抽象的な仕方で定義される理念的対象であるが、それと同時に、われわれが日常経験において直接的に意識に与えられる具体的な知覚現象でもあるからである。
- 連続体の迷宮は、数学的には、点集合と延長の概念の間の衝突。
- しかし、連続体の迷宮は、より普遍的・一般的な観点からは、感覚として与えられる連続的な延長的事物の心的表象と、知性が概念として与える非連続的な点や数などの心的表象を、どのように調和させるのかという問題。

連続体の迷宮

- 沢口：「連続体の問題は、哲学の方向からは、感性と理性の関係という古来の大問題とほとんど同一の課題である」
- すなわち、連続体の迷宮は、想像力の問題であり、概念と知覚との関係、心と世界との関係に関する、包括的な問題。
- ここに真の困難。このような包括的問題は、細分化された現代の諸科学にはおよそ不向きであり、それを扱う包括的理論はまだ存在しない。→**哲学史的探求の意義も何かしらあるはず。**

私の哲学的課題

- ライプニッツを軸として、これまでに哲学者たちがこの難問にどのように立ち向かったかについての哲学史を描き、現代と歴史の双方を批判的に考察することから何らかの洞察を得ることが、私の哲学的課題。
- 悲観：哲学史における歴史学的厳密性の浸透により、このような形での系譜学的研究は、かなり厳しくなった。
- 希望：すべてを網羅する通時的研究を行うことは不可能に近いが、少なくともある論争史を哲学的観点から批判的に描くことによって、現在との連続性は保てるのではないか。

数理哲学史のアプローチ

- 数理哲学史は、歴史的背景を踏まえつつ、数学と哲学の相互影響関係について考察する手法。
- その意味では、一般の哲学史からは縁遠いマイナーな領域。
- 他方で、西洋の哲学において、数学は哲学の王道のトピックとしてもあった。→本流への再注目（回帰？）
- 古代より、数学と哲学とは密接な紐帯で結ばれてきたのであり、そのことは、偉大な数学者-哲学者において見事に例証されてきた。
- また、レオン・ブランシュヴィク以降、フランスのエピステモロジーには、数学の自律的發展のうちに歴史性を読み解く、数理哲学史研究の伝統があった。

数学（史）と哲学（史）の乖離

- 一般には、数学者が哲学に対して、逆に、哲学者が数学に対して、無関心な態度をとる場合が多いのが実情。
- 数学は自律性をもった純粹に形式的な学問。
- 哲学も、数学を前提せずに扱っているテーマが数多くある。
- 数学史と哲学史もまた、分野間の緊密な交流があるわけではなく、大きく乖離しているのが現状。
- 日本と欧米の状況。欧米では、数学の哲学や歴史の研究は今でも活況であり、専門家同士の交流も盛ん。日本はどうか？

数理哲学史の必要性

- 数学と哲学、両分野の発展にとって、ひいては学問そのものの発展にとって、互いの交流が不可欠であるならば、数学と哲学の関係を研究する分野もまた、不可欠である。
- この分野が数学の哲学と**数理哲学史**。
- 後者は、数学と哲学が関わる諸概念の歴史性により注目する。
- この分野が生産的・建設的であるためには、数理哲学史の研究や著作は、一方で、数学に心を寄せるものには哲学的関心を、他方で、哲学に心を寄せるものには数学的関心を喚起させるようにして、描かれる必要がある。

私自身の数理哲学史研究

- 私の場合、「**抽象の問題**」をテーマとして、デカルトやライプニッツをはじめとした、初期近代における数学的実践と哲学の諸理論を踏まえつつ、数学と哲学の影響関係を研究。
- 抽象の問題とは、「抽象はいかにして可能か」、つまり、世界の具体的対象からいかにして抽象的概念を形成しうるのか、また逆に、抽象から具体はいかにして再現可能なのかという伝統的問題。
- 学問分類における抽象の問題や、抽象的存在をめぐる形而上学、抽象概念の形成をめぐる認識論、そして、数学的実践における抽象が関わる。 → **数学と哲学の相互関係を考える核心的主題。**

数理哲学史の意義

- 数理哲学史のアプローチの利点：数学の技術的發展を主に描く数学史の中では語られない、**哲学者の数学観**に注目することを可能にする。
- 明証知を与える基礎学問として数学が考えられたデカルト以降の近世哲学の発展は、数学と不可分な関係にあったのであり、その中には数学的業績として数学史には残らずとも、哲学的には大きな影響をもった考えなどもあるう。
- 私の考える「数理哲学史」では、そうした数学と哲学の関係から生成される思想を浮かび上がらせることが目標。

数学史は数理哲学史を必要とするか

- 数学史の研究が、あくまで数学内部の自律的な発展にどれだけ寄与したかという観点からなされるものであるとすると、数理哲学史への参照の必要性はかなり限定される。
- 数学史の関心の中心が、定理の発見に至る過程や証明・作図などの当時の数学的実践にあることは疑いない。
- しかし、**数学史は単なる史料の集積や数学的事実に関する歴史的関心にとどまるものでもない**。新しい定理を発見するという仕方で数学の発展そのものには寄与していなくても、数学者と論争したり、代替的理論を提示している哲学者にも関心を示すようなことは大いにありうる（たとえば、無限小概念の歴史をめぐる、ホッブズやバークリなど）。

数学史は数理哲学史を必要とするか

- 少なくとも20世紀以降にならないと、数学と哲学の境界がそれほどきっぱりとしたものであるとは言いがたく、「**数学の自律性**」というのも、かなり現代的な認識にほかならない。
- たとえば、Mathematicaという用語は、16世紀西欧では「**数学的諸学**」を指し、「自由七科」の後半の四科、幾何学・算術・天文学・音楽を総括する概念として使われていた。
- 確実性と有用性をもつ学問という数学の近代的意味が確立するのは、クラヴィウス以降のことであり、ガリレオやデカルトらが登場する17世紀の科学革命において。

数学史は数理哲学史を必要とするか

- 数学と哲学が専門分野として大きく乖離した20世紀以降、両者の関係を問うためには、両分野で相当な専門的知見をもっていなければならない、両者の交流はいっそう厳しくなり、交流可能な領域はごく限定的なものとなるであろう。
- しかし、それまでの大部分の数学の歴史は、哲学と交流をもっていた。



- ある時代の哲学理論を踏まえつつ数学との関係を考察する数理哲学史は、独自の研究分野としての意義を十分持ちうる。

数理哲学史の課題

- それでも、マイナーな領域であることは変わらない。
- 数学史家に限らず哲学者や数学者にとっても、数理哲学史は限定的な関心しか得られないことが予想される。
- 数学・哲学・歴史という複数のディシプリンにまたがることで、研究者の参入を困難にしているのでは。
- これらの問題に明確な答えはまだ持っていないが、ディシプリンについては、高度なところでのバランス感覚が必要であろう。
- ただ、数学史家や哲学者、数学者が持つであろう限定的な関心は、哲学と数学そして歴史にまたがる、普遍的な関心になる。

近藤洋逸

- 数理哲学史研究者のモデルケース：たとえば近藤洋逸。
- 近藤洋逸は、数学史においても、哲学との交流関係を重視する必要を主張（『幾何学思想史』1946、『数学思想史序説』1947）。
- 近藤は哲学科出身の数学史家であり、その哲学に対するシンパシーを考慮する必要がある。しかし、**数学史においても、哲学との交流関係を重視する観点**は、**現在でも重要である**と考える。

結論

- 歴史学の観点から語られる哲学史は、歴史的な厳密性に基づき、当時の事細かな事情を解明してくれる資料として、一方では重宝されよう。他方で、現在ともつながる問題意識から切断されてしまうと、哲学的動機が失われる危険性がある。
- 哲学という普遍的動機をもつ分野のために哲学史を研究するかぎり、それは現在の諸問題から切断するような歴史学にはなりえないだろう。
- また、歴史学が哲学の歴史から何か普遍的な意義を見出そうとするかぎりは、現代的な問題意識との連続性を何らかの形で取り入れざるをえなくなるはずである。

結論

- **したがって、理想は、哲学と歴史の両者を接続する研究である。**
- **(個人/グループ) 研究全体として、あるいは業界全体として、バランスをとることが大事。**
- **哲学史が哲学と歴史の双方を志向する以上、両者は本来相補的であるべき。**
- **複数の規範を対立させずにうまく調和させる、バランス感覚。**

結論

- しかし、**現実問題として**、現代の哲学の関心領域の縮小化と、歴史研究による局所化が押し進めば、哲学と歴史、双方を志向する哲学史という学問の本性上、哲学史自身もそうした動きの中で引き裂かれ、**縮小化・局所化の傾向は避けられない**だろう。
- 哲学史における、数理哲学史からの乖離現象は、現代における学問の流行や、専門分化の傾向を反映しているところがあるろう。

結論

- 数学に限らず、現代の学問の専門分化の傾向に引きずられて、哲学史が扱う領域がどんどん限定されていくことも予測される。
- 今では、生物学の哲学や情報科学の哲学、認知科学の哲学など、諸科学の哲学があるが、専門性が一層高まり、哲学や哲学史のバックグラウンドがおよそ役に立たないようなことになれば、そういった領域も哲学史からは縁遠くなり、科学史のテリトリーとなって、哲学史が扱う領域を狭めることになる。
- こうした意味では、哲学史がもつ哲学業界外部に対する普遍的意義について、悲観的にならざるをえない。

結論

- しかし哲学的関心と歴史的事実をつなぐ唯一の分野が哲学史。

「哲学史は哲学者と歴史家の間で行われるコミュニケーションを可能にする共通語である。哲学史なき哲学は、空虚や盲目ではないにしても、唾である」（カントをもじったセラーズをもじる）。

- アナクロニズムの危険性を認識しつつも、ある問題について、現在との何らかの連続性を見いだすこともまた、われわれが現在を生きる人間である以上、学問として不可欠なことであろう。